

99%の非暴力レジスタンス運動のこと

2011. 11. 20 須田 稔

11月17日、ニューヨークで警察発表3万2500人のデモ。「99%にとっての歴史的行動日」。「1%の強欲と腐敗はもう我慢できない 99%の非暴力抵抗運動は、この日、全米30以上の都市でも展開された」。

日本語版『誇りと抵抗』(集英社新書・04年6月)の著者アルンダティ・ロイが11月16日、NYCのワシントン・スクエアにある人民大学で行ったスピーチの前文を以下に訳してみた。

「火曜日の朝、警察はズコッティ公園から人びとを閉め出したが、今日人びとは戻ってきました。警察は知るべきです、抗議運動は領域を狙う闘い(battle)ではない、私たちはあちこちの公園を占拠したくて闘っている(fighting)のではない、正義を求めて闘っている、それも合州国の人民のためだけでなく万人のための正義を求めて闘っているのだということを知るべきなのです。

占拠運動が合州国で始まった9月17日以降、みなさんが達成したのは、新しい想像力、新しい政治言語を帝国の心臓部に導入したこと、人みなに催眠術をかけてゾンビ(ふぬけ)に変えてしまおうとする体制、無頓着な消費主義を幸福や達成感と同等視させる体制、この体制に夢を持つ権利を再生させたことです。

作家として言いたいのですが、これは巨大な業績です。感謝しきれないほどです。

正義のことを口にしましたが、今日、こうして話しているとき、合州国軍隊はイラクとアフガニスタンに占領戦争をおこなっており、無人機はパキスタンとさらに奥地で民間人を殺し、何万という合州国軍隊と暗殺者集団がアフリカに進軍しています。イラクとアフガニスタンの占領経費が何十兆ドルでも不足だとして、イランに対する戦争さえあからさまに口にして

います。

大恐慌以来、武器の製造と戦争の輸出が合州国の経済を刺戟する主要な方策でした。最近も、オバマ大統領のもと、穏健派ムスリムのサウジアラビアと600億ドルの兵器取引を行い、アラブ首長国連邦とはバンカーバスターを何千と売りつけたがっています。アフリカの最貧国すべてを合わせたよりも貧困者の多い私の国インドには50億ドル相当の軍用機を売りつけました。

ヒロシマ・ナガサキからヴェトナム・朝鮮・ラテンアメリカに至る戦争、アメリカ的生活様式を確保するための戦争で、何百万人の生命を奪ったのでした。この、世界中が渴仰すべきとされるモデルであるアメリカ的生活様式の合州国で、わずか400人が全米人口の半数の富を保有しているのです。何千という人が家と職場から追い出される一方で、政府は銀行と企業を救済し、アメリカン・インターナショナル・グループ(AIG)だけに1820億ドルを与えたのです。

インド政府は合州国政府の経済政策を崇敬していて、20年間の自由市場経済の結果、最も富裕な100人のインド人が国のGNPの4分の1に相当する財産を所有、他方、人民の80%は1日50セント以下で暮らしています。25万人の農民が死の連鎖的変動で自殺に追いやられました。これを進歩と呼び、インドはスーパーパワーと考える向きがあるのです。みなさんと同じく私たちも資格十分なのですが、核爆弾を保有し、公序良俗に反する不平等があります。

占拠運動は世界中の他の何千というレジスタンス運動と合流し、最貧困の人民が決起し、最富裕の企業を立ち止まらせています。あなたがた合州国の人民が私たちに味方して帝国の心臓部でこういう事をしてくれるとは、実は私たちの多くは夢想だにしなかったのです。このことの意味の巨大さを伝える術がないほどです。

彼ら 1%の人が知りたいとも思わず実際知らないでいるのは、私たちの怒りです。私たちには彼らを破滅させる力が十分にあるということです。が、ここで一緒に考えたい幾つかの事柄、「革命前の」思考があります。

私たちは、不平等を生み出すこの体制に蓋をしたいのです。企業は無論のこと個人も、富や財産を何ものにも束縛されずに蓄積することに上限を設けたいのです。”cap-ists”（栓をつける人）、”lid-ites”（蓋をする人）として、次の事を要求するのです。

- ・ ビジネスでCROSS—OWNERSHIP（1つの企業による、新聞社とラジオ・テレビ会社の共同所有。例えば、読売新聞社と読売テレビを所有すること。）を終わらせること。例えば、武器製造業者はTV局経営が、鉱山企業は新聞発行が、実業家一族は大学に資金提供が、できないし、製薬会社は公衆保健衛生の資金をコントロールできない。
- ・ 天然資源とインフラストラクチャー（水の供給・電気・健康・教育）は民間化・私有化はできない。
- ・ 誰もが住宅・教育・医療の権利をもつべきである。
- ・ 富豪の子どもはその両親の富を相続できない。

この闘い(struggle)は私たちの想像力を覚醒させました。資本主義は正義の観念を、ただ『人間の権利』の意味に矮小化し、平等を夢見る観念は冒涇的だとしてきました。

私たちは、ただ何かに置換する必要がある体制、それを改革(reform)すべく下手な修繕をするために闘っているではありません(are not fighting)。

「栓をつける人」として、「蓋をする人」としてみなさんの闘い(struggle)にご挨拶をおくります。

Salaam（平安を祈ります） and Zindabad(万歳)（ CommonDreams.org に拠る）。

アルンダティ・ロイ (Arundhati Roy) は 1959 年にインド・ケララ州で生れた。デビュー作『小さきものたちの神』でイギリスのブッカー賞を受賞。「戦争や人権侵害に反対する姿勢でも、世界から尊敬を集めている」と『誇りと抵抗』の奥付に記される。

彼女は真正の知識人の一人だと僕は思う。アメリカ批判も真率だ。「合州国は罪を認めもせず、あがないもせず、アフリカ系アメリカ人や先住アメリカ人に謝りもせず、それにももちろんやり方を改めもせず(いまではその残虐さを輸出までしている)。・・・広島と長崎の一般市民に原子爆弾を投下したこと。戦争は終わりにかけていた。殺された数十万の日本人も、孫子の代まで癌に苦しむ数多くの被爆者も、世界平和を脅かす存在ではなかった。彼らは一般市民だった。世界貿易センターやペンタゴンで犠牲になったのが一般市民だったように。広島と長崎の爆撃は、アメリカの力を誇示するための冷酷で計算された実験だった。当時、トルーマン大統領はこれを「歴史上最も偉大な出来事」と評した」。

そして、キングに付いて書く人が大抵無視するキングの冷徹な洞察のことば、を彼女は紹介するのだ。「一九六七年四月四日、暗殺される一年前、マーティン・ルーサー・キングはニューヨークのリヴァサイド教会で演説を行った。こんな風に。「ゲットーの抑圧された人びとの暴力に対し、わたしは二度と反対の声を上げることは出来ない。その前にまず、今日の世界で最大の暴力賄い人に対し、はっきりと異議を唱えなければならぬからだ——つまり、私自身の政府に対して」。

